

NPO 法人日本ビオトープ協会 「都市と生物多様性シンポジウム」

本年度の計画として企画していた「都市と生物多様性シンポジウム」の開催は、平成 24 年 10 月 18 日に地元の造園団体やビオトープ関係団体との共催で、涌井史郎東京都市大学教授を講師に招き「環境未来都市を目指して-生物多様性とこれからの都市(まち)づくり」と題した一般公開の講演会として富山市の北日本新聞ホールに於いて行なわれた。150 名余りの聴衆を前に涌井氏は、これからの生活においても生物多様性の視点が如何に大切であるかを熱弁された。特に印象に残った話は、次の通りである。1992年のリオデジャネイロでの地球サミットで初めて世界の政治家達が国際的に地球の環境悪化について議論し、CO²削減を含めた気候変動枠組条約と生物多様性条約調印の過程で、各国の利害の相克で調整するのに時間がかかり会議が動かなくなった時のことである。それを救ったのは日系三世でセバン・スズキと言う十三才のたった一人の少女で、会議に呼ばれ彼女が行ったスピーチをここで紹介する。

「大変なことが、ものすごい勢いで起こっているのに、私達人間ときたらまだ余裕のあるような顔をしています。まだ子供の私には、この危機を救うのに何をしたらいいのかははっきり分かりません。あなた方大人にも良い解決法なんて持っていないでしょう。(中略)どうやって直したら良いか分からないものをこれ以上壊し続けるのをどうかやめて下さい。」

この少女の感動的なスピーチの後、会議はスムーズに運営され二つの条約の国際的な調印に至ったということであった。

講演を聞いた多くの聴衆は、生物多様性とは単に生物の種類の高さを言うのではなく、長い歴史の中で変化しながら人間を含めて互いにつながりを持って生きている様々な生物とそれらを支える環境のことだと理解し、そのことがビオトープだと感じていただいた。受付では、当協会よりビオトープ関連の広報誌や入会申込案内のパンフレット、又環境省からいただいた生物多様性に係る資料などが配られ、一般の皆様にも生物多様性やビオトープについて考えていただくとても良い機会となった。

北陸・信越地区委員長 久郷 慎治 (株式会社 久郷一樹園)

